

兄内膳が忠義を感じ思召によりて、重き職を命せらるゝよし、上意ありなんけるとぞ、誠に死後のめいぼく、忠義の驗と申べし、

〔惟任退治記〕濃州住人松野平介一忠、其夜在邊土、夜討之由聞之、馳來之處、御所之軍相果將軍田信

長被召御腹之間、不及力、走入妙顯寺、可切追腹定覺悟、一忠元醫者家業、而然兼文武之士也、常歌道懸情、又參學曝眼、故爲辭世、作一首歌一句偈云、

そのきはに消殘る身の浮雲も終には同じ道の山風

手握活人三尺劍、即今截斷盡乾坤、

如此書置、切腹、縊、臟腑死、寔當世無雙働也、○下

〔賤嶽合戰記〕下勝家敗北、并毛受勝○勝一本助忠死之事

毛受勝介、其趣を見、柴田○勝に申けるは、御意之上、とうかう申に似たれども、それは昔尾州にお

いて、度々軍になれたる下々、數多持給ひしに、因て、其働も有しぞかし、此度は見逃き、にげに、數

度逢たる下々にて、おはしまし候故、過半落失ぬ、昨日より思召よりし事を、先手の者ども不致死

も、又如此落ちりしも、皆極軍のまゐるし、眼前に候、是にて云ひがいなき討死をなされ、名も知れぬ

者の手にかゝり給はゞ、後代迄口おしかるべし、願くは北の庄へ御歸城被成、御心靜に御自害候

へ、某御馬印を請取奉り、御名代に是にて討死を致候べし、其隙に急ぎ御歸陣被成候へ、斯申候も

とうかう思召候はゞ、見るが内に、徒に成べう覺奉ると、急ぎ諫奉れば、流石其道に得たる勝家な

れば、尤なりとて、五幣を勝助に渡し、心もあらん者は、毛受到與せよと云捨て、諸鎧を合せ退し也、

勝助五幣を請取、我手の者三百餘人、其外勝家の小姓馬廻、少々左右に隨へ、原彦次郎居たりし要

害、幸に明しかば、是に取入、老母妻子共方へ、形見の物を、舊功の者に渡し遣し、かくて盃を出し、樽

あまた取ちらし、それくと云し時、皆土器おつとり、酌たりけり、追行兵共、柴田が馬印を見